『笈の小文』の表現の瑕疵について

濱　森太郎

一　一つの疑義

松尾芭蕉作『笈の小文』に顕著な叙述の瑕疵について考える場合、必ず看過出来ない一編の論文がある。故宮本三郎氏が書いたその論文は、単純に言えば、『笈の小文』は、大津の門人河合乙州（かわいおとくに）が松尾芭蕉の没後に、草稿断片をもとに、一編の旅の集として編集したものではないか、と主張するものである。[注1] この『笈の小文』乙州編集説の反響は大きなもので、当時、たちまち幾つかの反論が書かれたが、中でも『笈の小文』の草稿本写しを提示した大礒義雄氏、[注2] また、各断片の接合に見える『笈の小文』の文脈を説明して、謡曲形式の文脈構成を援用した高橋庄次氏、[注3] さらに、これを元禄三年（一六九〇）に死亡した旅の同行者坪井杜国追悼を主題とした紀行文であると読み解いた尾形仂氏[注4]の発言が注目された。三氏は、この作品が各断片の単純な接合ではなく、当初から明瞭な意図や骨格をもって構成された一作品だと主張したのである。

こうして『笈の小文』乙州編集説は、ほぼ確実に一掃されたが、反論が大きく、終息の波も素早かったために、議論の出発点となった表現上の沢山の瑕疵が軽い吟味の後に放置されて残った。『笈の小文』の表現上の瑕疵は、一体、いかなる表現努力の過程で生まれ、瑕疵の形で放置されたのか。宮本論文の根本にあるはずのこの問が、乙州編集説の論破によって掻き消されたのである。

二『笈の小文』について

貞享四年（一六八七）一〇月二五日に江戸深川を出発し、貞享五年（一六八八）四月下旬に京都に辿り着くまでの近畿巡礼を取り扱う同紀行は、ジャンル上は俳諧の紀行文である。「惣七宛芭蕉書簡貞享五年四月二五日付」に見るとおり、同紀行はこの回国修行中からすでに記録の形で書き進められていた。その『笈の小文』が、貞享

五年（元禄元年と改元）八月下旬の江戸帰着と共に書き進められたことは想像に難くない。だが、乙州本『笈の小文』所収の芭蕉発句五三句のうち、推敲の痕跡がある一六句を分析することで同紀行の正規の執筆時期を考察した阿部正美氏[注5]は、この作品の成立を元禄二年（一六八九）以後、元禄三年以前と見なしている。また綱島三千代氏は、『曠野』所収句の中に須磨・明石関係句、八句が一句も含まれず、その未収句「かたつぶり」・「蛸壷や」が元禄四年（一六九一）七月刊『猿蓑』に初出することを上げて、『笈の小文』が現在の形に仕上げられた時期を『猿蓑』出版と余り隔たらぬ時期と推定する。[注6]さらに井本農一氏は、『幻住庵記』に『笈の小文』と重複する記事がある事以下数点を根拠に、『笈の小文』が現在の形に整形される時期を幻住庵滞在（元禄三年四月入庵）から「嵯峨日記」が書かれる元禄四年五月四日までと推定する。[注7]

こうして、貞享五年八月下旬の江戸帰着時から書き進められた『笈の小文』は、元禄三年四月から元禄四年七月までに、さらに今一度、一作品として整形されたことが推定されている。

その長い形成過程にも関わらず、断片の集合かと見まがう『笈の小文』の文章の特質は、文章の瑕疵と見なされるかたちで放置されてきた。その理由の第一は、事実、相当の瑕疵があるからで、この作品が草稿断片を未整理のまま残したものだという主張に大差はない。唯一人、高橋氏は、これに加えて文脈の切断や飛躍を常套手段とする謡曲型の文章構成が採用されたせいだと主張する。[注8]しかし、この主張を仮に肯定したとしても、『笈の小文』の瑕疵の大半が高橋氏の主張で説明できる訳ではない。『笈の小文』の表現上の瑕疵は、一体、いかなる表現努力の過程で生まれ、未完成の形で放置されたのか、という問は、依然として残るのである。

三　大きすぎる序章

それではまず、宮本氏が『笈の小文』の瑕疵と見なす代表的な二箇所の表現に立ち返ってみよう。最初に取り上げるのは、『笈の小文』の冒頭部にある論理文、次に取り上げるのは筆者が「伊賀・伊勢紀行」と名付ける表現上の一ブロックである。この二箇所を取り上げる事で作品前半の主要な問題箇所を取り上げることになる。またこの二箇所は芭蕉による文脈操作の痕跡が明瞭であるため、なぜ、文脈に瑕疵や断絶が生ずるのかを実証的に説明する事が出来る。

さて、単純に言えば『笈の小文』は概略、【起】江戸・渥美・名古屋紀行、[注9]【承】伊賀・伊勢紀行、【転】吉野・高野紀行、【結】須磨・明石紀行の起承転結構成だと考えれば分かりやすい。処女作『野ざらし紀行』における吉野登山、代表作『奥の細道』における羽黒三山巡礼と同様、紀行文の頂点に回国修行者の「聖地」を配置し、長い歩行に信仰生活の意味を持たせることで紀行文の起承転結を定めている。[注10]

その中にあって『笈の小文』の【起】の部に位置する序章（1）

自己省察、（2）旅支度、（3）道の記論（原文は後掲）に接続上の不具合を感じるのは誰しもだが、この序章（1）について、宮本氏は「紀行の序としては、あまりに重々しく、頭でっかちである。」「これはこれ自身独立した一つの俳文と私は考えたい。」という。また（1）（2）（3）の切れ続きの不自然さに関わる井本農一氏の指摘[注11]に賛同して「何か不自然な違和感を持つ文であることを承認して居られるためではあるまいか。」ともいう。

この冒頭文（1）（2）（3）の切れ続きに不自然さが有ることは周知の事実である。だが、その不自然さは、実は「結果」であって「原因」ではない。序章（1）の論理文を一纏めにして「これ自身独立した一つの俳文」ではないかと思案してみても、その不自然さの原因は見えてこない。

では、この切れ続きの不自然さの原因は何か。この冒頭文の組み立てを次のように整理すれば、ここで実際に起きた事が見えるようになる。

【1】（1）自己省察・（3）道の記論

A百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好こと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。ある時は倦で放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかふて、是が為に身安からず。しばらく身を立む事をねがへども、これが為にさへられ、暫ゝ学て愚を暁ン事をおもへども、是が為に破られ、つゐ(ママ)に無能無芸にして、只此一筋に繋る。

B西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類ス。夷狄を出、鳥獣を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

C抑道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余は皆俤似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ〳〵もいふべく覚侍れども、黄哥蘇(奇)新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其処〳〵の風景心に残り、山舘野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所〴〵跡や先やと書集侍るぞ、猶酔ル者の慌語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聴せよ。

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

【2】（2）旅支度

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、旅人と我名よばれん初しぐれ

又山茶花を宿〻にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て其角亭におゐて関送」せんともてなす。（中略）ゆへある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覚えられけれ。

まず序章（2）の叙事文「旅支度」を掲示【2】のように除外すること、次に残る序章（1）をその文意に従ってA自己省察とB造化芸能論とに二分すること、その上で次の（3）道の記論をCの位置に接続すること。それによって、この論理文全体を見渡す事ができる。この気付きが遅れた原因は、この「旅支度」をそのままにして、序章を一纏めにしたことにある。実際、乙州本『笈の小文』、大礒本『笈の小文』の字面は、「只此一筋に繋る。B西行の和歌における」が一行内で直結しており、これを前後に分けてA自己省察、B造化芸能論と二分する思案は湧きにくい。

さらに乙州本では一行末が一文節の途中で切れるケースが多く、また発句「神垣や」「月はあれど」の行末が二文字の折り返しで書かれている。芭蕉の自筆テキストの文字数は現行テキストより二〜三文字多かった可能性がある。また、最上段に本文、そこから一〜二字下げて発句、さらに一〜二字下げて発句前書を書く、句・文書き分けは、大礒本・雲英本とも共通する。この句・文の書き分けが章段毎の改行表示と重なるのだが、初稿とされる大礒本では、この書式が曖昧で、【転】吉野・高野紀行に至って初めて規則的なものに変わる。

ちなみにこの大礒本では、（2）「旅支度」の前段並びに後段の切れ目に改行は無く、これに続く雲英本では（2）「旅支度」の前段の切れ目のみに改行がある。そして乙州本では（2）「旅支度」の前段並びに後段の切れ目に改行がある。もしこの改行に注目すれば、「旅支度」を後日の挿入ではないかと疑う思案は浮かびやすい。

実際、この論理文の文脈を点検すると、序章前半Aの末尾にある「只此一筋に繋る。」（傍点筆者、以下同）と、序章B冒頭の「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。」とは一続きの文脈と言える。前文の「只此一筋に繋る」を受けて、それを「其貫道する物は一なり」と、もう一度確認する構文だからである。この構文は「此一筋に繋る」ものと「貫道する」一筋のものとを繋いだ上で、「造化にしたがひ」「四時を友と」する一道随順の芸能論を提唱している。

一方、同じく序章の論理文（3）冒頭の「抑（そもそも）」は、前段にあるA自己省察、B造化芸能論を踏まえて本旨を展開する意図を伝える接続詞で、前段の「造化芸能論」で風雅の一筋に数えられ

た「西行・宗祇・雪舟・利休」に倣って新規に練達の作家「紀氏・長明・阿仏の尼」を一列に並べてその実力を称揚した上で、その余の文人に対する新たな批判を展開する。その余の文人たちはみな「俤似かよひ」、古文の「糟粕」を改めることを疎かにしたと言うのである。

ここで新らたに言い起こされていることは、前段の風雅の達人の系譜を受けて、「並み」の文筆家の行動を批判することである。「並み」の文筆家には、「其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ〳〵もいふべく覚侍れども、黄哥蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。」ということだが、まことに、烏滸がましい批判である。

ただしその論調はすぐに大きく転調して「されども」以下、心に残る「風景」、旅中の「くるしき愁」など、「わすれぬ所〴〵跡や先やと書集」めることを是認する心情が綴られる。「無能無芸」なまま文芸に繋がれる自己省察が認識の高慢さを押さえるからである。

すなわち練達の文人の列記と「並み」の文筆家批判は、前段A・Bの風雅の一筋を受け、一方、先後構わず書き綴る冴えない己の文芸作法は、前段Aに書かれたつたない自己省察に繋がる。そして最後に、「猶醉ル者の慍語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聴せよ。」と、序章Aのような厳しい「自己省察」に回帰する。文脈は執拗なまでの自己省察、熱烈な凡作者批判、過激な自己卑下と大きくうねって完結している。

しかもこの俳文の首尾は「百骸九竅の中に物有」（荘子・斉物論第二）に始まり、「「猶醉ル者の慍語にひとしく（中略）、人又亡聴せよ。」（荘子・斉物論第二）で結ばれる。加えて首部の「百骸九竅」は「百骸九竅六藏賅（そなわり）而存焉」（荘子・斉物論第二）の不用意な引用（心は六藏の一つ。風羅坊（心）を取り上げる時は「六藏」までの引用が望まれる。）、結末の「猶醉ル者の慍語にひとしく（中略）、人又亡聴せよ。」は『荘子』の斉物論（慍語は「妄語」、亡聴は「妄聴」）の片言にあたる。これは、同じ出典、同種の引用態度を首尾に配して一文の首尾を区画したもので、論旨もこの「人又亡聴せよ。」で完結している。

ちなみに、このひとまとまりは最後に配置された一句が一文全体を引き締める俳文書式とみることもできる。「いねる人の譫言（うはごと）」を「跡や先やと書集」めるつたない表現行為を心の闇とし、目覚め時の浜千鳥の声によってその迷妄から覚醒する様を語って、この一文の締め括りとした句文となるからである。(注12)「燈を取ては岡（罔）両に是非をこらす」（『猿蓑』所収「幻住庵記」）「虚無に眼をひらき、孱顔（さんがん）に虱を捫（ひねっ）て座す。」（米沢家蔵「幻住庵記」）など、心の闇に棲む罔両や虚無にまなこをこらすことは、芭蕉ならずとも覚醒の契機と見なされていた。

こうしてこの句文の文脈を整理すると、ここにあった【1】は独立した一俳文であり、その原型に照らせば井本氏や宮本氏が言う「違

和感」はなかったことになる。つまりこれまで一様に語られていた序章の切れ続きの悪さは、一つの論理文の中に（2）の叙事文、旅支度が強いて挿入され、巡礼記の序章らしい体裁を整えた結果生じたものと見なされるのである。

またその原型【1】から言える事は、一に、この作品の始発点が尾張の国に歩みを進める風羅坊の内心を描く事にあり、二に尾張の国における風羅坊に、『野ざらし紀行』や『冬の日』と同じ風狂人の気質を付与すること、[注13]さらに三に、「百骸九竅」に始まり「人又亡聴せよ」と結ばれる『荘子』「斉物論」の引用によって、風羅坊に相応の学識、秀でた論理性、人目を惹くような論述技能を付与する事が計られていたことである。

四　伊賀・伊勢紀行

次に『笈の小文』の【承】の部に位置する「伊賀・伊勢紀行」は、冒頭にある「師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす。」という叙述で始まる。ここは乙州本でも改行して書き始められている。尾張と伊勢とは元来、木曽三川で地勢上区分され、東日本・西日本の境界に当たるが、ここには「名古屋」と「旧里（伊賀）」とを地勢で区切って、叙述を区分する意図が見える。またこの「伊賀・伊勢紀行」の結末は、「弥生半過る程、そゞろにうき立（つ）心の花の、我を道引枝折（みちびく）となりて」と、花咲く春の到来、沸き立つ行楽の気分で始まる吉野巡礼の始発の記事によって、もう一度、空間的に区画されている。

この二つの仕切りで区画される「伊賀・伊勢紀行」の叙述は、語り手すなわち風羅坊が故郷で迎えた越年行事並びに親族打ち揃っての墓参と、早春の行楽を兼ねた伊勢参宮とで二分されるが、その越年・墓参と伊勢参宮との間には、足取りや時間推移等の繋がりが欠けている。その原因とされる「さま〴〵の」発句は、確かに伊賀の旧主の庭園で披露された「桜」の発句で、この次に、「衣更着」の風俗や「梅の花」の開花が続くというのは奇妙である。宮本三郎氏はここに「詞書なしに「さま〴〵の事おもひ出す桜哉」という一句を出すのは、いかにも唐突で」「乙州本の句の挿入が芭蕉自身の手に成ったとは考えがたい」（『蕉風俳諧論考』三〇一頁）という。以下、具体的にその発句の配列を示す（後続の資料と比較するために頭に番号を付す）。

伊賀国阿波の庄といふ所に、俊乗上人の旧跡有。護峰山新大仏寺とかや云（中略）。

①丈六にかげろふ高し石の上
②さま〴〵の事おもひ出す桜哉

伊勢山田

③何の木の花とはしらず匂哉
④裸にはまだ衣更着の嵐哉

菩提山

⑤此山のかなしさ告よ野老堀（ところ）

龍尚舎

⑥物の名を先とふ芦のわか葉哉

網代民部雪堂に会

⑦梅の木に猶やどり木や梅の花

草庵会

⑧いも植て門は葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなし。（中略）

⑨御子良子の一もとゆかし梅の花

⑩神垣やおもひもかけずねはんぞう

他本では②「さま〴〵の」句の前書に「故主蝉吟公の庭にて」とある。[注14] その故主の庭園にこの時、何桜が咲いたかは不明である（現在は早咲きのしだれ桜が植えられている）。だが、何桜が咲くにしろ、②の「桜」の後に「衣更着」や「梅の花」を配置することは奇妙である。季節の進行や植物の開花の順行に反するからである。[注15] もしこの奇妙な配列さえ小事と見えるような大きな加筆要因がなければ、これ自体が大きな瑕疵の放置と見なされるだろう。

ちなみに、この「伊賀・伊勢紀行」の障害物となっている発句「さま〴〵の」は、今栄蔵氏が紹介する次の『笈の小文』断簡では省かれている。[注16]

阿波大仏

①丈六にかげらふ高し石の跡

いせ

③何の木の花とハしらず匂哉

神垣のうちに梅一木もみえず。いかなる故にやと人に尋侍れバ、唯ゆへはなくて、むかしゟ一木もなし。おこらごの舘の後に一もと有といふヲ

⑨梅稀に一もとゆかし子良の舘

一有が妻

○暖簾のおくものふかし北の梅

網代民部息雪堂会。ちゝが風雅をそふ。

⑦梅の木に猶やどりぎや梅花

龍尚舎にあふ

⑥ものゝ名をまづとふ荻のわかば哉

二乗軒と云草庵會

⑧やぶ椿かどは律のわかばかな

菩堤（提）山即叟

⑤山寺のかなしさ告よ野老堀（掘）

久保倉右近會、雨降

○かミこ着てぬるとも折ン雨の花

十五日、外宮の舘にありて

⑩神垣やおもひもかけずねはん像（句読点、濁点傍線傍書筆者。以下同じ。）

『笈の小文』本文に先立って書かれたと見られるこの断簡では、伊勢神宮関係者との俳事がそれと分るように丁寧に配列されている。ただし『笈の小文』では、○「暖簾の」、○「かミこ着て」の二句が除外され、②「さま〳〵の」、④「裸には」の二句が追加されている。また、①⑤⑥⑧⑨の発句（傍線部）には推敲の跡がある。その推敲の跡を見ると、『笈の小文』には明らかに推敲後の発句が掲出されている。そしてその掲出された発句贈答を通じて、和やかな風交を演出する作意が見える。ただしその作意の点では、『笈の小文』の伊勢参宮記事より断簡の方が生の人情のやり取りに近いように見える。「伊賀・伊勢紀行」の原型と言われるこの『笈の小文』断簡に照らすと、発句「さま〳〵の」が『笈の小文』本文の執筆時に新規に追加されたかと予想されやすい。先に宮本氏がこの句を後に「挿入」されたものと考えたのは、この草稿があるからである。

では、旧主一族との邂逅を偲ぶこの一句が、事実上、季節上、行程上、素材配列上、齟齬を来すことを承知の上で追加された理由は何か。また、なぜ不自然さの解消策が未定のまま、放置されたのか。

実は、事実関係から言えば、伊勢参宮は二月中旬に終了して、芭蕉は二月十八日には、伊賀上野に帰郷している。「二月四日参宮いたし、当月十八日、親年忌（おやねんき）御座候付、伊賀へかへり候」「尾張の杜国もよし野へ行脚せんと伊勢迄来候而、只今一所に居候」（杉風宛芭蕉書簡、元禄元年二月）という書簡の文面もある。芭蕉と杜国とは、伊勢で落ち合った後、芭蕉の生国伊賀上野にて春暖を待ち、三月十九日に吉野巡礼に旅立っている。[注17] その伊賀滞在の模様を伝える服部土芳の『芭蕉翁全伝』には、次の記事がある。

○薬師寺月並初會

初桜折しもけふハ能日なり

○探丸氏別墅の花を

さま〳〵の事思ひ出すさくら哉

丈六の陽炎高し砂（ママ）の上

かげらふや俤つゞ（ママ）れいしの上

（中略）再吟シテ後、丈六のかたにきハまる。

○瓢竹庵ニテ

花を宿に初終りや廿日ほど

○旅立ツ日

此ほどを花に礼云別哉

此二句ハ瓢竹庵休息の時也。是ヨリ吉野の花ニ出ラレシ也。

万菊も

長閑さに何も思ハぬ昼寝哉

ト云句アリ

（今栄蔵著『芭蕉伝記の諸問題』三八三頁、翻刻「芭蕉翁全傳」）

この発句「初桜」「さま〳〵の」の後に「丈六の陽炎高し」「かげらふや俤つゞれ」が配置され、その次に、伊賀滞在中の桜の句々が配列されて、「廿日ほど」続いた花見の喜びが語られている。またこの句稿中には「是ヨリ吉野の花ニ出ラレシ也。」という服部土芳の解説がある。「吉野の花ニ出ラレ」とは、吉野における花見見物こそ、当初はこの吉野巡礼の主眼だったことを意味する。

ちなみにこの句稿によると、伊賀上野で開花する桜を堪能した芭蕉と杜国とは、そこから直ちに吉野の桜を目ざして旅立っている。杜国が言う「何も思ハぬ昼寐」とは、空米売買の罪で名古屋を追放された坪井杜国にも幽愁の霧を払う好日が訪れていたことを示している。

ところが『笈の小文』では、伊勢神宮巡礼を終えた風羅坊を「かのいらこ崎にてちぎり置し人」が「い勢にて出むかひ」て後、伊勢からいきなり吉野行脚に旅立つかたちに変更されている。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけずねはんぞう

弥生半過る程、そゞろにうき立（つ）心の花の、我を道引（く）枝折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人の、い勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ。

（　）内は筆者。以下同じ）

すでに「衣更着（貞享五年二月四日）」頃には制作されている伊勢参宮の発句③～⑩がここに配置される理由は、「かのいらこ崎にてちぎり置し人の、い勢にて出むかひ、」という『笈の小文』の叙述から導かれるだろう。その整合性を維持するためには伊賀滞在中の句稿の後に「伊勢参宮句稿」が挿入される必要があるからである。

そこでその伊勢巡礼を『笈の小文』の追加部と見て一度除外することでこの箇所を原型に戻すと、叙述は次のようで支障ない事になる。

春立てまだ九日の野山哉

枯芝やゝかげろふの一二寸

（中略）

①丈六にかげろふ高し石の上

②さま〳〵の事おもひ出す桜哉

弥生半過る程、そゞろにうき立（つ）心の花の、我を道引（く）枝折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人の、い勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ。

『笈の小文』冒頭で露沾公（岩城内藤藩、藩主息）に餞別句を賜って「ゆへある人」らしく江戸を旅立ったのは、他ならぬ風羅坊である。その風羅坊が故郷で新年を迎え、一族再会を果たした後に、春暖の季節と共に吉野を目指す時期が、この「さま〳〵の」発句が詠出

される時期である。故郷出立に当たって、「故主蝉吟公の庭」で催された祝宴に参加して詠唱された「さま〳〵の」発句の背後にあるのは、晴れがましさを伴う祝賀の意識だろう。旧主藤堂良長（探丸）に招かれて出座する祝賀の儀には、いよいよ念願の吉野行脚に乗り出す行人を送るという、目に見えない筋立が有ったはずである。同じく紀行冒頭で「岩城の住、長太郎と云もの」が「関送りせん」と用意した祝宴の句会に正客として招かれたのも風羅坊ではなかったか。他本で「故主蝉吟公の庭にて」（一葉本・蝶夢本）と前書きするこの「さま〳〵の」発句は、この位置にある事で誠に上首尾に生きて働くのである。

つまり『笈の小文』の原型は伊賀に尋ね寄った杜国を同道して行われた吉野における花見遊山にあり、「さま〳〵の事おもひ出す桜哉」に続く伊勢参宮の記事③～⑩は、「かのいらこ崎にてちぎり置し人」が「い勢にて」出迎え、そこから伊賀滞在を中抜きにして直に吉野の花見に出掛けるという【虚構】に従って新規に追加された叙述と見なされるのである（その理由は後述する）。

五　瑕疵の道理

先に引用した「惣七宛芭蕉書簡」の末尾に付載された杜国の旅行メモには、「三月十九日伊賀上野を出て三十四日。道のほど百三十里。此内、船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、雨にあふ事十四日。」という記事がある。杜国にとってこの度の近畿巡礼は、伊賀上野を出立して吉野に向かった「貞享五年三月十九日」を始発とし、京都でこの「惣七宛芭蕉書簡」が書かれた「四月二十五日」で終了する巡礼修行だった事が分る。

しかし、吉野における花見遊山の前に伊勢参宮記が配置されると、この事情は少々変質する。二月（更衣）の伊勢参宮、三月中旬の吉野の花見遊山、三月末、和歌浦で春を見送り、四月に、大阪・尼崎・兵庫を船便で通過し、須磨・明石の古戦場を廻る約二ヶ月半の長旅が出現するからである。しかも、伊勢参宮が始発となる事で、今回の旅には宗教色が加わり、物見遊山さながらの行者の巡礼行にも修行色が付与されるのである。

もとよりこの風羅坊は江戸出立時点ですでに「関送り」のもてなしを受ける仏道修行者である。風羅坊の旅が最初から宗教色を帯びていたことは承知しておく必要がある。当初から目的地が吉野と定められているのは、吉野が修験道の道者の聖地だったからに他ならない。また、渥美半島の付け根の保美村から船便を使って伊勢の大湊に上陸した坪井杜国の旅行もまた、伊勢参拝を目指した巡礼行に他ならない。

ただ、先に述べた通り、風羅坊の帰郷に続く約四ヶ月の、墓参・越年・挨拶・休息・花見三昧は、巡礼というには長すぎる滞在になる。事実上「帰郷」の意味を持つこの期間を巡礼行に組み入れるこ

とには無理がある。また坪井杜国自身がそう自覚したように、伊賀上野を発して吉野の花見を目指す彼らの巡礼は、三月十九日に始まる。その実態に幾分かの修正を加えるには、伊勢から直に吉野山を目指す日程の組替えが欠かせない。ここに先の虚構の意味を見る事ができる。

こうして『笈の小文』の旅行の原型を確認し、「さま〴〵の」発句に続く「伊勢句稿」③～⑩の挿入によって「伊勢」から直に吉野の花見遊山に出立する【虚構】の意味を読み取ってみると、臨時的にしろ「伊勢句稿」③～⑩を「さま〴〵の」発句の後に挿入する理由の過半を見通す事が出来る。伊勢参宮の記事③～⑩を「さま〴〵の」発句の後に配置する事で生じる不自然さは重々承知の上で、なおかつ、この虚構を採用する理由は確かに有りそうである。

六　遺文の奥深さ

松尾芭蕉作『笈の小文』は、仏道修行者風羅坊が背中に背負った箱状のキャリー（笈）に納められていた書き差しの小文を意味する。その小文を見つけ出し、梓に乗せる事で、その修行者の隠された威徳を広布するところに版本『笈の小文』の意味がある。たとえそれが未完の紀行文であろうと、それは編者河合乙州から見れば、さまざまに読み解かれるべき瑕疵である。

『笈の小文』の【起】の部の原型が「自己省察」「造化芸能論」「道の記論」にあり、【承】の部の原型が杜国を同道して行われた吉野における花見遊山だったことが確認されると、分る事がもう三つある。一つは『笈の小文』冒頭部、露沾公に餞別句を賜って「ゆへある人」らしく江戸を旅立つ叙述は、仮に幾分の変更はあるとしても、「伊勢句稿」挿入以前にすでに本文に組み込まれていたこと、また一つは、「かのいらこ崎にてちぎり置し人」すなわち杜国を尋ねて、伊良子崎を訪問する「伊良子崎紀行」の叙述もすでに書かれていたこと、[注18]三つ目は杜国を同道して行われた吉野遊山が、純正、回国行脚の物語に書き換えられつつあることである。

この長い射程をもつ改訂作業が誰の手に拠るものか、今はまだ判然としない。しかし今後、この遺文の瑕疵を読み取る作業が意義深い作業になることは言い添えて良いことではあるまいか。

注

注1、初出は、宮本三郎著「『笈の小文』への疑問」『文学』昭和四五年四月号・五月号。同著『蕉風俳諧論考』笠間書院刊、昭和四九年八月に再録。かなり大きな論争だったため、主要関係者の論文は、『日本文学研究資料叢書　芭蕉Ⅱ』（有精堂刊、昭和五二年八月）に一括して再録されている。

注2、大礒義雄著『笈の小文（異本）の成立の研究』ひたく書房刊、昭和五六年二月。

注3、初出は、高橋庄次著「『笈の小文』の謡曲構成」『国語と国文学』昭和四八年八月号。後に同著『芭蕉連作詩篇の研究―日本連作詩歌史序説―』笠間書院刊、昭和五四年二月に収録。

注4、初出は、尾形仂著「鎮魂の旅情」『国語と国文学』昭和五一年一月号。『日本文学研究資料叢書　芭蕉Ⅱ』再録。

注5、山本荷兮編『曠野』（元禄二年三月成立）所収の同句型よりは洗練され、宝井其角（きかく）編『花摘』（元禄三年刊）所収の句型（同年五月の条に掲載）に比べると見劣りがする点を根拠としている。阿部正美著『芭蕉伝記考説』明治書院刊、昭和三六年一〇月。

注6、綱島三千代著「『笈の小文』成立上の諸問題」『連歌俳諧研究』二五号、昭和三八年七月。『日本文学研究資料叢書叢書　芭蕉Ⅱ』再録。

注7、「幻住庵記」（元禄三年八月成立）冒頭部と重複する文言がある事、「嵯峨日記」では杜国の夢を見て落涙した四月二七日の翌日から、幻住庵で書きためた草稿の清書に取り掛かっている事が根拠となる。井本農一著「『笈の小文』と『おくの細道』の関係」『成蹊国文』創刊号、昭和四三年一月。井本農一著『『笈の小文』の執筆と元禄四年四月下旬の芭蕉」『連歌俳諧研究』三八号、昭和四五年三月。

注8、注3に同じ。

注9、起承転結の起の部にあたる「江戸・渥美・名古屋」の内、「渥美・名古屋」についても、「伊良胡紀行」と呼ばれる詞章の断片が紹介されている。森川昭著「伊良古崎紀行真蹟・奥州餞等発句切」（『連歌俳諧研究』三七号、昭和四四年九月）には「よしだに泊る夜　寒けれどふたり旅ねぞたのもしき」以下、発句七句を連ねている。

注10、詳しくは拙著『野ざらし紀行の成立』三重大学出版会刊、二〇〇九年三月、『巡礼記『奥の細道』』三重大学出版会刊、平成一四年三月、参照。

注11、井本農一著『笈の小文』と『おくの細道』の関係」の発言を踏まえる。『蕉風俳諧論考』二九九～三〇〇頁。

注12、芭蕉真蹟（下郷氏蔵）には「ね覚は松風の里、よびつぎは夜明てから（中略）」と前書きしてこの句が記載されている。夜明けに鳴く呼続の浜（名古屋の名所）の千鳥は、「星崎の闇を見よ」と鳴くの意。芭蕉を泊めた鳴海の知足は「芭蕉翁を送る／君により知る呼継のちどり哉」の句を贈って「呼継のちどり」が「闇を見よ」と発声する着想への共感を伝えている。この時の「千鳥」を機縁に執筆が始まった『千鳥掛』（正徳二年序）に因む俳文として書かれた可能性もあるか。

注13、『冬の日』冒頭には「笠は長途の雨にほころび、帋子はとまり〳〵のあらしにもめたり。侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼへける（中略）狂句木がらしの身は竹斎に似たる哉」と、その風狂振りが披露されている。同句は『野ざらし紀行』にも収録。

注14、他本には、「故主蝉吟公の庭にて」（一葉本・蝶夢本）の前書がある。事実は前書通りだが、乙州本では削除されている。『芭蕉連作詩篇の研究―日本連作詩歌史序説―』、七三五～七三八頁。

注15、『笈の小文』後半部ではこうした叙述の入れ替えの痕跡を吉野山「滝尽くし」「高野和歌浦」「須磨明石」に確認することができる。

注16、今栄蔵著「新出『蕉翁全伝附録』」『連歌俳諧研究』四八号、一九七五年一月。同著『芭蕉伝記の諸問題』新典社刊、平成四年九月に収録。五〇二頁。

注17、惣七宛芭蕉書簡、貞享五年四月二五日付。

注18、注9の通り、この本文の下敷となる「伊良胡紀行真蹟」はすでに書かれていたので、比較的早い時期に成文化されていたと推測される。

なお乙州本『笈の小文』・「惣七宛芭蕉書簡」（貞享五年筆）の翻字掲出は、『古典俳文学大系5　芭蕉集　全』に準拠した。また『荘子』は寛文五年刊『荘子献斎口義』、解釈は岩波文庫版『荘子』によった。

―はま・もりたろう、三重大学出版会編集長―